

こころのやりのき

性智の巻

前編

蠟燭の使命	一
白衣の菩薩に	四
念佛者の二動機	六

後編

絶対理性	一一
力と慧	二〇
形式宗と内容宗	二一
一切智と一切能	二四
三相と一體異相	二五
識と智	二六

三身	二八
三性	二九
一貫の理性	三一
物。心。理。	三一
六度	三二
光明	三三
如来	三三
四恩	三四
三學	三五
佛界	三七
きよき友	三八
偏執の宗義	三九
宇宙實體	四一
スピノザ其他	四三

蠟燭の使命

凡そ世に有ゆる物夫々の天分あり。各天の使命を以て世に存在す。蠟燭の使命は人の爲に闇き處を照し人の燈明として其の使命を果す。如何に大きい蠟燭にても火を點せざれば、其の職分を果すことは能きぬ。宗教的人類として人を觀る時は、人の精神の奥なる靈性は**大ミオヤ**の使命なる靈的蠟燭である。故に人の心靈には**ミオヤ**の慈悲の光明を點する時は、靈的**光明**燈りつゝ、**赫々**として威力ある意義ある**光明**中の生活爲すことができる本能を具有て居る。粘土を蠟燭の形にして之に火を點しても燈るものでない。人類以下の動物なる犬や馬に知識の火をつけやうとして如何に教育を施すとも、彼等には知識の火は燈らぬ。況んや宗教的靈的の信仰の**光明**はつくことはできぬ。人類は然らず。宗教の教を以て之等に信念を修養すべく指導し、如来の**光明**の人の心靈に燃つく時は、其の信念が初めて活潑に活て來る。蠟燭にても火が點

せぬ間は、また活て居らぬ。既に火がつく時は赫々と燃えて活てくる。人は信念が靈的に赫々として燈るにあらざれば**ミオヤ**の使命を果すことができぬ。人は信念の火がまだつかぬ間は、人生を盲目的動的に見てをる。自己の歸趣する處那邊に在る哉自覺せずまた今現に、自己は何の爲めに活つゝある哉を自覺せず、只飽まで食ひ肉に活れば既に足れりと想へり。心靈空しく損するも敢て惜くおもはず。

靈に燈りつゝ、人生は**ミオヤ**の**光明**の大道を有終の美ある至善の都に達する向上の一路なるを自覺せん。人生の自覺他にあらず、自己心靈の蠟燭に**如来**の**光明**の火を點じ靈に燈して人生の行路を取る。自己の信念に燈りつゝ、ある**光明**、之れ人生の自覺なり。信念の光の外に自覺あるなし。曰く、既に人生の使命とは、自己靈性的蠟燭に**光明**を點じて自覺の生活之れなりと既に知れり。然らば我等が心は**如来**蠟燭に如何に意を用ひて**如来**の**光明**發得すべきぞ、願はくば其の方法を示し給へと。答へて君が**心靈**に**如来**の**光明**の火を點せんに他なし、即ち是念佛**三昧**である。念佛**三昧**とは君が一心に佛を念する時に、佛の心光君が念の心に加はり心々相續し、念々**如来**を憶念する時に、所念の佛光念の心に加はる。既に人の心靈に**如来**の**光明**念々燃つきたる時を信念發得と云ふ。既に發得する時は蠟燭に火のつきたる如し。念佛の安心即ち心の安置方最大事なり。甲の蠟火に乙の蠟燭の心先を接觸するにあらざれば、甲の火が乙の蠟に傳はらず。

念佛**三昧**が一心に心を選びて方を一にし、心を一に專に彌陀を念じて餘念を交へず、専ら心々相續して彌陀を念する時は、乙の蠟の心が甲の火に接觸するが故に火を傳ふ。七覺支の中に擇法覺支即ち是なり。乙の蠟の心先を甲の蠟火に接觸するが故に火を得ること能く思ふて知るべし。

されば釋尊は阿彌陀佛眞金色にして端正無比なりと想へと示しなされたのは、眞金色圓光徹照して端正無比なるは最も行者の注意を惹き易し。こゝに一心に專注すべきなり。また觀經に佛の白毫相之のみに專注すと云ふも、人の心意は一境に集中するに

惹き易し。心が統一せず、亂想を以ては三昧惹き起し難し。されば導師は失意聾盲瘖啞癡人の如くならずば法眼開け難しと示されしも、此の一心の蠟の心先を専ら甲の客體の火の一境に注めしむる爲である。如來の靈に接觸せざれば自己の心靈の信火傳發し難し。己に信念の光明喚發するを得ず。此の光明は蠟燭と火との關係の如し。蠟を離れて火燈はなく火を離れて蠟獨り燈らず、蠟の火なるか將た火の蠟なるか、如來の光明は人の心意を發得せしむ。人の靈は如來の靈火點じて始めて活るにいたるなり。人は天のミオヤの使命の下に人と生れしなり。我等には之が豫備として本能の奥底に、靈火の點すべき可能性有り。是動物と異なる所なり。されば君靈に活きて人生の使命を果し給へ。人生闇黒の中に葬り去らば、永遠の闇黒即ち獄に墮せんこと必せり。

白衣の菩薩に

如來の聖意に清められ、聖寵によりて清きに生れ觀音勢至の勝友に圍まる、泥中の白蓮たる高橋優婆塞にまで白す。實に希有なる上善人よ、此三月三昧會中に斯の芬陀利華を白衣の中に發見することを得たりしは深く如來に感謝せざるを得ぬことにて候。白衣の菩薩よ、其折申し述たる如く機教相應とは佛教の格言、彌陀の大慈も自力教教的の輩には只現世祈禱の稱名と信する。されば山家の大師も現世利益には念佛に如くはなしと教へ給ひ、又百萬邊の念佛は息災延命病即消滅の功德ありと識されたり。次に超自然教の人は彌陀の本願念佛は死後往生のみの特効劑の如く見做される。然しながら彌陀は絶対無限の大威力、無縁の大慈悲者、圓滿の徳不可思議者なれば、若くは現世、若くは未來と云ふ局限あるなし。そは相對的に規定せらるゝ所の人間をものものに有する偏見のみ。絶対なる如來、何ぞ夫れ過去現在未來の局限あらん、开は人間自から障壁を造りて自己の要求を願ふなり。されば自から我等は逆も現世に於て證入の分にあざれば、せめて此肉體の壽命終りてのちこの靈を極樂の淨土におくることを期する人の爲めには彌陀は死後の大慈悲者と見え、又現在より如來の大光明

中に靈的生活を要求する人の爲には絶対なる大光明者は歡び迎へて光明中の人となし給ふ。淺きせまき人の心を以て絶対なる如來を見るは半面より窺ふこと能はざるなり。されば我等は第三期の絶対光明中に現在を通して永遠の光明界の人となることを期す。何を是とし、何を非とせんや唯その機に隨つてその見解を殊にするのみ。

念佛者の一動機

先日祖山三昧會より歸來の後さる信者よりの間に、先づ頃三昧中一方の教師は唯往生極樂の爲に口に名號を唱へよ唱ふればその功德にて死後に往生すと教ふ。一方には只偏に絶対的の大人格なる如來をば御名を通じて大人格に接せよ、現に靈に活くる如來の靈的光明に觸れて現在より活きよとの教の中、何れを取るべきや吾人の大に惑ふ所なり。余は之に答へて云はく、元來如來は絕對にして現未の差別なし。然して我らは本願の念佛に依るとは、本願の念佛とは、我等が南無と呼ぶ聲を現に聞き給ひて直接に報ひて心光を以て我を光化し給ふ如來を念する所に本願の意義あることを信す。今現に我らが肉體の活つゝあるは、現に我らに光熱化を與へ給ふ太陽の力あればなり。その如く現に念する我らが心靈に對する太陽の如き無量光如來の心光を被りて我らが信念は靈に活さるゝなり。我らは靈に活つゝ永遠に向ふ生命の信仰である。小兒が泣く聲に慈母の乳房を與へられて靈の育てを受くるなり。されば聖善導は「口に佛をよび奉れば佛聞給ひ、身に敬禮すれば佛眼圓かに見給へり。意に念じ奉れば佛はこれを知り給ふ。我らがミオヤを憶念し奉ればミオヤは我等を憶念し給ふ。彼此の三業は親密にして須臾も離れぬなかなる所に念佛の眞意あることを教ふ。二の導き方、甲は念佛の功德を積みて極樂に往生すべきと教へ給ひ、乙は彌陀の大人格を信賴して慈悲の御名を通してミオヤの慈光に觸れ、現在より靈に活きよと教ふ。我らは惑ひぬ二つの中何れに依るべきや。これに答へて、何れを是とし、また非とするなし、其機類に相應したる方に依るべし。然れども我等如き聞き拙き拙き悪くき輩

は現に離るゝことなき大悲の親を離れては小兒の育つことのできぬと同じく大悲のおや様を精神的に離れぬやうにミオヤの御育てを仰ぐ外なき者なり。おもふに彼の無爲泥洹の淨土に生れての後は毫髮の惡なき御國と聞つれば、假令如來を離れても或はよいかも知らぬ。然れども此世に於ては我ら如きはどうしても大悲の親様を離れたならば實に危きものにて候。されば我等は無量光如來を一の親と仰ぎ、ミオヤの聖意を意とし光明の御名を呼びて、あなたの光明を被り、光明の御育てに預り、光明のなかに生活させて戴き、而ていよゝ命の終りには光明の御許に進みゆくことにて、寢てもさめても光明名號を稱へて光明中の生活に入り現在を通じて永遠の光明に進趣せんことをぞねがはし。されども意樂同じからず必ずしも萬人同じかれとは言はれ難し。

宗祖法然上人の宗教的心理を窺ふに皮肉骨髓あり。宗祖の御傳と聖光上人傳書とを比較すれば聖光上人は正しく宗祖の眞髓を傳へられたる上の傳書、御傳は天台の舜昌法印の皮相より見たる見聞の纂集なれば正に宗祖の靈的眞髓を窺はんと欲せば二祖聖光上人の宗要等に依るべしと存じ候。

絶對理性

宇宙本質内容は絶對理性態即ち一切智心之を如來平等性智と名づく。性智は鏡智と同じく總相なり、普徧なり。前者は表相後者は内質前者は觀念態後者は理性態なり。宇宙實質は全體觀念態なると共に萬有の内面は理性態なり。

自然現象大にしては天體星宿の運行より小にしては地上の動植物に至るまで其秩序の整然たるを見れば之を統攝する理性なかるべからず。亦一切小大となく萬物の擾々たる混雜たる、社會の現象萬差の別々性と根底の理性とを、水と波との關係の如く變轉いかに無窮なるも水性を失はざる如く、萬法を分折し選擇する普徧に一貫せる理性あるを認むべし。萬物は各自表面は孤立なる如く理性に繋りて不可割の關係を有す。若し萬物に統一せる理系の有るなくんば吾人は如何にして自己以外の萬物を理解することを得ん。普遍なる理性によりて特殊の萬物を推論することを得るは一切に一

貫せる真理即ち性智の光なり。また換言せば總該萬有心の内容理性なり。

性智

絕對理性の宇宙本質内容性にして萬有を統攝するに兩面に規律をなす。生産門には天則秩序の理性とし攝取門には終局目的の理性と顯はる。同一の理性が外面に開展すると内面に開展するものなり。

天則因果律——生産と統攝

天則理性とは時間空間の形式より相待規定に世界雑多の萬有と秩序に開展し生産し雑多の萬物を統一し總括する理にして、秩序は一切小大となく萬物を規定せる世界因果相關の中に齊整せる秩序あるは萬物は非理的分子の結合より偶發したるに非ずして悉く理論的規律に隨つて動くべき定相あればなり。故に萬物の因果的に起伏隱顯せる理論的因果律に規定さる。天則は即ち性智なり。

本質の理性と顯動の萬物。隨緣不變

天則が因果的に運動力は時間の形式より世界を開展し萬物を生産し染淨の相を呈し生滅變遷の波を起し空間的には相互競争の浪を揚ぐ之を隨緣と名づく。運動力が舉體運動して染淨の法と成るも其の内容は理性的なるを失はず。相待の萬物いかに變轉するも眞性は不變なり。

本質内性を相待規定の萬物に於て之を分別するに三性とす。

圓成實性、依他起性、徧計所執性。

實性とは眞如の理、圓滿と成就と眞實の三義を具す。即ち永恒心靈態の本質は絕對無規永恒不變の義。

依他。因縁に生起する處の法、謂く諸の事物が色心等の相を依他又緣起性と名づく。即ち世界相待規定の理なり。

所執性。無明の眞理に達せず迷謬して因縁所成の五蘊を徧計して實我實法と謂ふ。

一一

一四

圓	依	徧
三性名義	隨緣	情有
不變	似有	無性
		理無

(三義に由て無異此即ち本を動せずして而も常に未なり。經曰法身流轉五道謂衆生也)
(三義に由て三性共一際同一無異未を壞せずして而も常に本なり、經に衆生即涅槃不更滅也)

合して是不一門なり。是故に眞は妄の末を該ね妄は眞の源に徹して性相融通無碍。圓性が隨緣して染淨と成ると雖も而も常に自性を失はず。唯自性を失はざる故に隨緣して染淨と成る。猶し明鏡の染淨を現するが如し染淨を現すれども鏡の性を失ふなし。眞理染淨と現すれども方に性淨を顯はす。

依他。因縁に依つて似有を顯はす。似有は無自性。故に空なり。涅槃に因縁の故に有無自性の故に空。因縁即無性不二門。

所執性。情に當りて執に稱つて有を現すれども畢竟は無。無を横計して實有を認む前の因縁を離れて實に我あるに非ず全此自我を計するは唯執のみあつて理あるに非ず信論に自性清淨心無明の風に因つて動じて染心と爲る。

天則の理性に普遍と特殊の二性あり。

天則秩序によりて世界の相待規定たる緣起の萬法に普遍性と特殊性に別つ。普遍性とは一切相待規定たる萬有は、大にして天體星宿より小大となく因縁に規定する理性陰陽二動雌雄兩性の如き即ち共通點なり。天然固有性一切生物が動植物を通じて同一の生活の形式規律に従ふ。意識的精神生活を望む如き動物と、植物の心理内性は意識と不識とに拘はらず同一理性の普遍的形式。

心理學の人の理感二性、亦智情意等の心理的機能の同一形式、化學上の生物を構造する化學的元素の一貫したる、心理學の人の精神分類智情意等のまた記憶心情等の心理、また生理機定の性欲の如き、貪瞋痴慢等の心法及び色法の普遍天則的共通性は因果律に規定せる、また進化説に唱ふる天則の理性に種々變易し進化發展の過程に種々に變易し因縁の相關に感應字化の理となり、また元形質の形を遺傳する理法の如きもの。

一三

一五

自然規定に普遍的の固有性を有し共通の性を有せり、之を依他起性と名づく。

第三の特殊性。世界萬類は天則規定の普遍性の中に自ら個々の特殊の内容性質を形成す。此個々の特殊の偏執性を形成する規定は實我の内容性にして、遠くは圓性の意志力に實現せられたる因縁規定に本づき、次には縁起隨縁の理法、先天的には父母祖先の遺傳に身體及精神の素質をうけ、物理的の一例を舉げれば多血性神經質膽汁質粘液質の陰氣陽氣なる如き。

後天には教育等のすべての周囲の刺戟に鎔化せられ、其他の自己の運命は全く個人的性格を特殊的の内容性格を造る之を偏執性と名づく。

天則と歸趣

天則秩序の理性と終局目的も同一の理性なり。世界の因果律に規定するときには理性は伏力にして意志は顯動體なり。例へば人が孩兒の時は不識の意志なり進んで長するに及びて意識的理性に開展せしと同じ。

天則理性に普遍と特殊あり。

眞如隨縁即ち實體が力に實現せらるゝに天則理性に規律に隨つて動くべき世界の因縁相關の規定によりて生産し一理より開發せられたる萬有に自然理法に變易の理法あり。また因縁の關係によりて應化して種々に變化しまた本質を遺傳する理法あり等流と名づく。かく萬類は因縁に規定せられたるものなり。

天然性格は天則に隨つて普遍的因果に規定せられたる性なり。一切の生物の動植物に通じて同一の生活的形式を有せるは二なり。之を依他の理性と名づく。因縁の關係に規定せられたるものなり。

特殊の性

因縁に規定せられたる萬物の性質が相互競争の理法により種々の方面に發展して種々に變化を生じ普遍的天然性格なると共に規定の結果は各個體は各特殊の性格なり。之を所執性とす。

各個人の性を造る本質内容を形成する資質は種々特殊のなり。普遍性は相待的二氣雌雄兩性の如き、また植物の通性、動物の通性を有す。同一の生活形式の如き、生理規定の生理機關に於ける人の心理腦髓神經營養生殖の機能の如き。

天然規定の因縁規定せられたる人の心理に形式内容感覺智力感情意志の如く各一定したる普遍性あり。

特殊性とは因縁規定せられたる萬物の個々の本質内容を形成せられたる内容に個々各特殊の性質を成す。特殊の性は天然規定の普遍性を逸出して第三の特殊の偏執性を鎔化す。人の本質内容を形成する規定は實我の内容にして先天的遺傳の肉體と及び精神性質の特殊の資質を稟く。膽汁質粘液質神經質多血質の如きは身體組織にして各特殊の性を稟く。後天的には教育その他周囲の事情等により種々の性質を成す。溫和なるあり兪暴なるあり。沈着なるあり又陽氣陰氣の如き種々あり。

形式には所執性は常に當り執に稱して有を現すれども畢竟は無。個人は各因縁に規定せられたる之を實に有と執し所執の迷は實我實法を執すとは是理性の偏執なり。因縁の約束の上には我なる實相と之を離して實に我あるに非ず。例へば木杭を横に鬼なりと思ふが如く木は鬼に非ず。鬼は畢竟無。計のみあつて理無なり。

一大理性の力に實現せられて天則に因縁に規定せられて世界萬物より人類と成りて生理規定によりて染淨と成つても其内面根底に於ては平等理性を失はず。理性を失はざるのみに非ず、能く隨縁して染淨と成る。染淨の相を現するが故に理性を顯はず理性によりて性淨を動せずして染淨を成す。

力と慧

生産門には力大に實現せられたる客観觀念體なれば、天則理性によりて生産せられたる衆生は力によつて實現し慧は伏力として存す。

智と力によりて、生物向上發達して心靈開發してよりは慧即ち理性がすべての意志等の動物的欲望等を指導す。

無餘涅槃界は眞理性即ち一切慧が圓滿に顯はれて力大は伏力として存す。

無住所涅槃は一體兩方面、眞理の方面は常寂光、理智不二、一切内容も微妙五塵、靈感覺の淨土にして、一面には慧が力を導きて常恒に靈的活動す。

形式宗と内容宗

理性と感性。理性は先天的伏能を開發し、感性は後天的に經驗によりて薰發す。理性は主體の根底、絶對主體、感性は客體啓示解脱靈化。

理性發展すれば絶對理性。

理性は圓滿に開發を期す。

理性は形式動機。

理性は神に對し能動的。

一切智は之

日の光線の如し

寂靜淡泊寒夜の月

形式宗は理性を表とし、感性を裏とし

内容宗は理性を本とし、感性を裏とす。

形式宗は人生及び世界觀共に理性の方面を知見す。理性を以て照見せば、苦も本法

身苦の厭ふべきなし。煩惱本菩提、見思の斷つべきなし等。

すべて苦樂等は感性に屬す。感性をすべて生死を見れば苦と感すべきなし。

理性宗は人生及び一切を理性に照見するが故に、苦惱及び感性なし。また若し感性を廢する時は特殊性なし。純一平等、理性宗は、差別を照す感性を外にする時は、無差別の一面に偏す。般若皆空の如きは感性を離れたる理性純粹形式一切内容を捨象したる形式。

世界觀に理性宗が若し一切内容を空して宇宙を觀すれば絶對平等理性のみ。超在一體教の如き、理性の一方のみを神の本質とし、一切内容、活動力の存するものは悉く之を迷とし無明とす。活動の方面は生滅變易なれば、迷なるが故に、世界及び衆生は迷なり、實物にあらず。

神は理性にして常恒不變なり。活動の方面を否定す。佛教般若部及び一切空宗皆爾り。

形式宗は如來本質に感覺的至美莊嚴及び如來相好慈悲智慧等の内容的方面を非す。婆羅門及び佛教聖道門と云ふもの之に屬す。

内容宗の動機は感性にもとづく。一切差別無量の境界苦樂の感情等(斷絶)

形式宗は如來本質に感覺的至美莊嚴及び如來相好慈悲智慧等の内容的方面を非す。婆羅門及び佛教聖道門と云ふもの之に屬す。

内容宗の動機は感性にもとづく。一切差別無量の境界苦樂の感情等(斷絶)

形式宗は如來本質に感覺的至美莊嚴及び如來相好慈悲智慧等の内容的方面を非す。

一切智と一切能

一大法身は之を法身如來藏心と號く。宇宙萬物を總合する故に總該萬有心とも云ふ。宇宙現象界はこの一大心の發現の一方面なり。

一切智と一切能とがありて智によりて天則秩序を整へ、能力によりて萬物を生々活動させる。

實體の本質は永恆不變如來の自境にて現象界は不識精神である。植物も生物みな動物や人類は肉の眼は覺えて意識するけれどもまだ心靈は無明である。これを六凡と云ふ。已に覺醒して宇宙と冥合したのが聖にて四種あり。この六凡四聖を十界と申し、法身より顯象したるものである。

愛

愛が一の人格的生活を有つと云ふことを見れば此根底は吾等の愛の源泉なり。吾らの精神の父なり。

吾等は人の子である。人と人の間に行はれる愛即ち人格の合一から出發して其根底の源泉を仰ぎ求め共存在を設定し而して此と交通しやうと勉むるのである。吾等の此の最上實在に對する關係は愛なり。即ち吾らの人格を捧げて之に歸入するのである。吾等の愛を以て之に對し彼亦愛を以て之に答ふる限りは、其關係は人格的である。

キリストは人の子の自覺によりて神の子たる實を現はした。彼は人の子である故に其生死によりて救はるる人を實現し之に依て亦救ふ神の力を現はした。眞に救はるるものゝ標本は即ち同時に救の力である。キリストは是故に眞の人で同時に眞の神である。神人同性は單に宗教でなくして活きた力なり。

三相と一體異相

宇宙の眞體は神の國なり。衆生は無明により塵に向ふが故に見聞せず。無明除く時は宇宙眞相顯る。カントが謂はゆる實行理性即ち實行無限の時間に達すべき靈界なり

と。是宗教の範圍。現象界は自然科學によつて研究。萬有生滅變化の形而上論は科學の範圍に非ず是宗教的形而上論。

實體は是哲學の範圍哲學は實體の本質及力用の形而上論。現象が實體にして體別なるに非ず。

識と智

表面に有限個々の世界は悉く絶對無限の理性なることは已に進化せる精神に理性的に認識することを得べし。自ら深く觀じ靜慮默考、超然たる理性に於て無限の星宿及び宇宙の一切は悉く自己精神と一致せる絶對理性の中にして之を離れたる一切境界なきことを認識すべし。

カントは謂らく、全部としての世界は觀念の對象にして認識の對象に非ずと。感覺界に對する認識は之れ謂ゆる識の分にして絶對の精神態に對する認識を智慧態とす。

識と智の別。フエヒネルの物の眞體は環の如し。外より觀れば總ての部分が中高にして内より觀れば總ての部分が中低なりと觀る所の内外は全く反對の感をなさしむ。現象は外觀にして他觀なり實體は自觀なり自觀は智なり。現象は感覺にして實體に同じからず。影と形との如し影は光線と共に消滅す。形はしからず。現象は感覺と共に消滅す。

心靈の自觀は智にして心靈の現象は物界なり。之を識界とも名づく。科學は識の境界にして高尚なる哲學は智の分界なり。

識の方面より即ち現象より研究する科學とし、内觀の心體を研究するを哲學と名づく。是智の分際なり。

權教にては現象と實體即ち識界と智界とを別つと雖も實は一元の唯心なり。圓教にては識の現象界と靈知の觀念界とは一體の兩方面なり。

天然現象界に相應せる識界の方面は實をもて論ずれば絶対無限の内容より有限の方面に現象界と観るものにして有限の識が表面と観る現象界は實は實體の裏面なり。外に眼を放つと思ふは内に向つて眼を向くるなり。

個人の寫象によつて現象界の有限と観る。

三 身

法身。無色無相にして萬物の本體一切世界の根底なり。法身は絶対精神態。横に十方に徧く、徧空間。豎に三際を貫く。徧時間。

報身。圓滿報身、一切慧一切能、内には無邊無碍の智慧態にして外は衆生の爲めに塵沙の妙色依正二報の莊嚴を顯現せしむる妙用あり。

應身。所有る世界に其國土の衆生に相應せる身相を現して爲めに攝取の恩寵を披らしむ釋尊の如し。

法身は無色無相にして一切處に周徧する實體なり。空間に充ちたる真心態。

報身。圓滿報身。智慧知らざる所なし。相好圓滿にして無邊の身。

應身は一つの世界に衆生を度せんが爲に示現しなる身にして釋尊の如し。一切世界に一佛づつ示現して報土に導引す。

阿彌陀は梵語。此には無量光。智慧光明照さざる處なきなり。無量壽、無始無終の義なり。

三性——一、圓實性。二、依他性、三、妄執性

一、圓性。絶対純粹真心。

二、依他世界性。第一より出で物心二質となる水の濁りたる如く七大色心十界依正となる。

三、一切衆生は第三の自家保存性と共に特殊の性益發展して善惡等の偏計自己妄執より起して其偏的發展の爲めに無量の種類となる。自己保存と偏的變態と又因縁資成力より無量に變ず。

一切衆生は一々三質を禀く。個體性のみにて第二性開發せざる下等動物。第二には社會的動物。第一は聖衆、

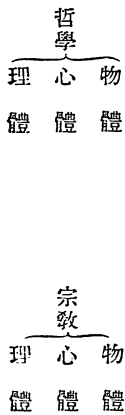
聖衆は絶対主義並に人類主義、第一理性を主として第三性を伴とす。第二は人類主義國家主義第一開發せずして内にあつて第二の保存に盡す。第三は利己主義其の孤立主義、動物。

第一絶対真心は本覺法身。一切衆生は之を眞體として靈を禀く。之を佛性と云ふ。第二は世界質。吾人の肉による心質肉慾等は之を禀く。肉と靈の調和より感覺感情記憶等の心質を禀く。第三は肉と靈との第一と第二とより禀けたる依他性なるを識らず國家的性質なり。利己主義個人主義は第三性より起る病的なり。

一貫の理性

天地自然は現象大にしては天地山川自然の法則によりて整齊し、小にして萬物雜然として社會の現象自然の状態紛々擾々たる、萬物に眞實平等の理性の上、水と波との關係の如く變轉いかに無窮なるも水の性を失はず。萬法を分析し概括する時は其の中に遍在する一貫の理脈あり。此の一貫の理系即ち眞如の理平等性なりと推理す。

物 心 理





六 度

六波羅密。ハラ密到彼岸。布施。三施。持戒十善十重禁四十八及八萬威儀戒。忍辱八風等を忍耐す。精進。禪定。四禪八定慮を静めること。智慧サトリノ智慧菩薩階級
 十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺即ち佛陀。

光 明

如來光明を太陽の光に例ふ。
 光線は物を明かに照す如く如來の光明は佛知見を開きて眞理を見せしむ。
 熱線、熱によつてあたゝかなる如く如來の光明は慈悲を以て人の心にあたゝかぬぐみをあたへ給ふ故に苦をぬき樂しみをあたふ。
 化學線、化學線によつて萬物を化する如く如來の光明の力によつて惡心を轉して善となし苦を轉し樂となしすべて人の精神靈化する力なり。

如 來

如來は學語にては眞如亦一大真心と云ふ。此を宗教の表號としては具體的にアミダ如來と名づく。
 又宇宙全體を擬神的に六大無碍色心不二の大日と稱す。
 又擬神的に父と呼ぶ一切萬有を生産し長養する根底なり。
 宗教はすべて此父を戀ひ、一たび父に背きて無明に迷ひ罪に亡びたりしもいかにし

て父に歸命し父の聖意と調和せんことを怖ふ。
 常に稱名するに父の聖名によりて父の聖旨にかなはしめんが爲なり。
 聖道家にても一休和尚は
 闍の世に鳴かぬ鳥の聲聞けば生れぬ先の父ぞ戀しきと
 父又は自性天真佛とも本來の眞面目とも
 同じく歌に
 本來の面目坊が立すがた一目見るより戀とこそなれ
 我のみか釋迦も達磨もあらかんも此君故に身をやつしける

四 恩

國王恩 人が安心に日くらしのできるは國の政がよく調ふて居る故國も治り外國のせめも受けず、みな國王の恩。
 父母恩 父母によらざれば生るゝこともぞだてらるゝこともなくからだも教育もみな父母のをかけなり。
 衆生恩 相互に世の中に何もかも調つて日くらしのできるは衆生恩。
 三寶恩 佛の慈悲と教の法とによりて救はるゝ、僧の教によりて之を知ることが出来る故。

三 學

一、戒 戒とは戒律、戒は三學の初め梵語に尸羅と曰ふ。戒とは非を防ぎ惡を制止すること。小乘に五戒八戒十善戒二百五十戒五百戒あり。大乘に三聚淨戒十重四十八輕戒八萬四千威儀戒あり。
 經に尸羅清淨ならざれば三昧現せずと。
 二、定。定とは禪定また靜慮。慮を静め想念の波動を止める義なり。四禪八定八背

捨等あり。

三六

大乘に天台止観に明す處のシャマタ即ち慮を止めて寂靜ならしむ。

又禪門の如來禪、祖師禪等あり、六祖曰く外六塵に馳せざるを坐と曰ひ内心喘がざるを禪と曰ふ。

三、慧とは觀慧即ち證入の慧なり。

天台止観の觀、證入の境を了々と觀照するの義。

一念三千十乘觀、空假中の三觀等なり。

淨土教の觀經、十六觀等は是觀慧の境なり。

佛知見を開示悟入するは慧なり。

禪の見性を慧と曰ふ。即ち自性清淨本來佛と異なることなきを悟る慧なり。

戒は賊を捕らへ、定は賊を縛し、慧は賊の頭を斬るが如しと。

戒は身口意三業の非惡の業作を防止制裁する意の作用

定は佛知見を得べき手段をととのへて慮を靜める意志作用。

慧は佛の境界を照見する理性作用。

佛界

十如とは如是相、性、體、力、作、因、緣、果、報、本末究竟等。

因と緣と。因は元の自分の心、緣とは善惡の外より刺撃を與へるもの。惡友と惡緣に遇はばいつしか夫に染て惡人と自分も友に（果れば）また報も惡し苦の果報あり。

此の中に於て九界は濁りにして佛界のみ清（）如し佛界に有れば無終圓滿の果位にして外に轉ずるものに非ず最上の覺位にして此上に理として有る事なし。

我ら本佛性あり。其佛性とは彌陀の法身より受し身にて、今佛の名號を稱へ佛の御心の光を受て自然と佛性開發して益々進で無上覺に至る此に六位あり。

三七

一切佛教中に彌陀の法の最勝なるは九界の妄を捨て、正直に眞實なる佛を念すれば御心をうけて自己の佛性開くことは、喩へば、木は火の性ありて自分と摩擦して出すは自力と云ひ他より火を付て自分に焚る他力と云ふ。彌陀の智光を受け自己の惡質が焚盡して無上覺が顯れ出づ。

三八

きよき友

きよき、てふ解釋を暫くのべます。清とは意義の廣き語にて宗教にては聖は宗教の神によりて聖くなるのである。神は聖なる光なり。宗教は此の光によりて清めらるるのである。いかに清めらるるとなれば神の方から申さば眞善美である。神は眞、絶對の眞にて毫も虚假妄偽なく、神は眞理の光なり、この眞理の光とへだてをなすものは人の知力に無明てふ闇に迷ふて私心に覆はれて聖き光を受ることが出來ぬ。

神は絶對なる善にまします。吾人の意志は罪惡である人間は生れながら罪惡であるそれが自然であるけれどもそれを罪惡の天性なることが未だ自覺出來ぬのは心が闇きためにわからぬのであるから外界の誘惑に遇ふてすでに潜伏せる罪惡が顯動となる。であるから生れたままでは清きでない。

絶對美は神のみ。神の國は神の聖圖の顯として絶對の美にして少しも（）

吾人の感情は非靈態にていろ／＼の不淨眼の欲耳の欲などのために意を汚染し六根清らにすること能はず。

知力無明の闇を除く時は吾人の精神が眞理にかなふ、明かなる正知と顯れ來る。迷を轉じて眞理の正知となるは即ちまことの宗教である。

偏執の宗義

世に偏執の宗義あり。彼らは自己の立宗判教のみを見て未だ曾て他宗の立宗判教の教相を知らず。世に片面學者いはゆるなまものしりほどあわれむべきものなし。たと

三九

へば日本の外に世界なしと謂ふ兒どもの如し。

各宗何れの宗旨として自己を以て獨尊とし他に悉く夫に攝せられそれに歸趣するは宗旨の建立の義なり定則なり。暫く三四を擧げば、

法華には爾前と開權顯實を立て法華を眞實とし爾前を方便とす。眞言は尙ほ進んで顯教と密教を立て法華と雖ども顯教なれば他は方便なり眞實は唯密教のみ。

禪には教内教外の二つを立て顯密共に教内の分にして方便なり眞實は教外別傳以心傳心の宗のみ。

淨土には聖淨二門を立て教外別傳も聖道にして娑婆應化の化法にして阿彌本門の直接の化法は唯淨門のみ。

釋迦は是阿彌の化身にして阿彌のみ絶對無限の本佛なり。故に阿彌陀と名づく。故に楞伽に十方法報應化も悉く阿彌より出づと。

相即無相。 頓中頓。 他力別風。 諸宗超過法門。

(了譽上人淨土願義及び十八通等に出づ。)

宇宙實體

新生物學説は自然と歴史とを結合するの媒介たり。ヘラクライトス曰く、一切の規則は一規則即ち神的規則によりて成立す。

宇宙は驚嘆に堪へざるもの、深奥の本質は潛心精慮するも到達すること能はず、かゝる不思議の實體に對し畏敬尊崇あらざる可からず。

宇宙は何ぞや、其構造は如何、其本質は如何、

世界は其本質及び存在上絶對的に獨立せる原子より成立せしや、然らば一切の生物は相互に影響し各原素は自餘の原素によりて規定せらるゝ普遍的相關を假定せしむ。

普遍的相關は奇異の事實にあらずや。

自然律は原子を驅りて相互に關係せしむるか、自然律は原子の實際の運動を表彰せ

るものにして外部より規定するものに非ず。絶對的に獨立せる原子が普遍的に相關せるは驚嘆の至りならずや。本質及び運動の無限の差異あること先天的に豫想す。一切の事物原子により惹起せらるるならば、宇宙體系、有機體思想感情實在は如何に奇ならずや。

原子論者竟には原子の秩序の變化のみにては思想感情の發生を説明するに窮し原子は廣袤と運動とを有するのみにあらで統一的原理及精神的原理をも包含するを自白すスピノーザ、世界は絶對的なる合一の本質、即ち實體にして獨立せり。特殊物は其實這般の實在の規定に過ぎず。實在は發展して有意識過程の世界となり、無意識過程の世界と此兩界を統一せる普遍的平行あり。此兩界を支配せる自然律は實體の自家規定に外ならず。外部より器械的に壓伏するものにあらず。

外部より實體を壓伏するものなく、實體は内的衝動によりて本質内容を開展して以て現象界となし自己の唯一自由の原因なり。

スピノーザ及其他の説

哲學中心は解脱救濟之れ元宗教要求に存す。形式は知的窮理的要求の徹底的實現。縱令ば眞の宗教的要求の満足は神に對する愛を完全に充すことに依つてのみ得らる。而して神を認むる事は神に對する愛を完全に充し得る唯一の途なり。神を認むるは一切事物の完全に第一原因たる神との十分關係に於て一切目的的觀的評價的を排して偏へに其本性を認識せんとし理解せんとす。

神は唯一の實體なり。實體とは其自身に於て存在し獨立無限唯一の眞實在なり。本性と存在せりとの外は考ふる能はざるものを自と云ふ。自己の本性と必然的に存在するを永恒と云ふ。一切の動作は必然の結果、必然の動作は眞の自由。第一原因にして萬物彼より生ず。

神は萬物内存原因にして超越的原因にあらず、有限物と世界と神との關係は所産的

自然能産的關係、神即自然、吾等は其屬性を知る。屬性とは智力が實體の本質を成すものと……。神は數多の屬性有す。吾人の知るは思惟と延長との二屬性。

有限因果の連絡は神に依屬す。物心は同一實體の二屬性、實體とは全く一に歸す。延長の方は物、思惟は精神。自己活動の増進努力を十分に徳と云ふ。人心の本質は思惟の力を完力に働かすにあり。凡て感官の知覺心の煩惱其他諸般目的觀的評價的觀念等は萬物を全き關係に認識せざる爲の空想にして斯の不十全觀念は不自由奴隸状態在、人間の自由は眞の認識を依て活動の本性を完、

斯の如き徳に伴ひ生ずる言ひ知らぬ悦の情は神に對する愛に存す。神に對する智力の愛は完全なる徳たる同時に實に充全なる福たり。世界の秩序は永恒的なれども眞の認識によりて合一す限りに於て人心また永恒的なり。永恒と云ふは個人の靈魂が無限時間中存在するが如き謂に非ず。唯永恒なる無限の神と直接に合一するの謂。此妙境に於て無限有限の區別は拭ひ去らるるが故に吾人の神に對する愛は即ち神が吾人に對する愛たるべし。

パウロ。及ゾロアスター猶太人ダマスコに赴く途中キリストの幻像を見其光に打たれて忽ち回心しキリストの死と復活とが其血を啜り肉を食ふことによりて神と同體となること、人の生れし儘の罪の體が改まりて神の性を受くに至ると。

ゾロアスター 前七世紀 ペルシャ、ウルミヤに生る三十歳、ダイイチャー川を横ぎる、善神の神デウマナフ 人界の外衣(肉身)を脱し禪定三昧に入る。アフラマフタ神等に謁して禮して教を受け大悟、七回天啓。善惡二神常に相戰ふ。身に善を行ひ 心に善を修すれば善の神の目的にかなひ惡を修すれば惡の神の領域に入 來世の苦樂は現世の善惡の行爲に、人死すれば天()に入り神の裁決を待つ。

アウグスティヌス曰、理性は吾人を現象以上の世界に入らしむ。共通普遍形而上學の眞理を認むるは絶對的の理性眞理存するなり。自我の存在を信する者は神の存在を信するを要す。人が神てふ唯一の原理より分れ來る故に人は相互に理解し又我以外の

存在を認識す。人の精神はある點に於て神と一致す。神は精神の太陽なり。神の光に依て精神は一切を認識す。一切の原塑は其觀念にして神の中にあり。神は一切實在を包含す。恒常的の眞理至高の實在にしてやがてイデヤの世界なり。一切の原因眞善美の根原なり。我等の認識は自我と神との認識中に包、吾人は表象的に認識するを得ざるなり。神は唯愛するのみ。彼は神を以て眞理の總、眞善美の根原と認む。人の精神三面、表象、判斷、意志、三者を統一する精神の實體、神の三位一體また全能全知全善の神性、世界觀は意志中心説を取る。本神の絶對の勢力意志によりて世界は創造せらる。神は絶えず世界を造る。世界に於ける一切は神に由て決定せらる。神に選れたる者は上天し無上福祉を受け他は長へに惡魔の國にて永く責罰を受く。

昭和四年二月十五日印刷
同 二十日發行

年七冊制は廢止

年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區隈町五五

印刷人 小林七太郎
電話小石川一四九五

發行所

東京市小石川區水邊二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番